

リポート
Report

大磯町郷土資料館だより

1992・7・31

5

もくじ

- | | |
|---------------------|---|
| ◇就任にあたって | 2 |
| ◇前館長のたわごと | 3 |
| ◇古代の餘綾(5) | 4 |
| ◇夏祭りの思い出/行事案内/資料の受入 | 6 |



就任にあたって

大磯町郷土資料館が開館して早4年を迎えようとしています。活動そのものはいささか小規模ではありますが、いくつかの試みは大磯町郷土資料館の進むべき方向を示そうとするものでありました。特に特別展として取り上げた島崎藤村、安田靉彦、三井高棟、吉田茂などは、当館の特徴として特筆されるべきものと考えております。また、そのような指針を示され、開館当初からご指導にあられた鈴木昇前館長のご苦心はひとかたならぬものであったと推察されます。

さて、このようななかで鈴木前館長の後任として大役を拝したわけですが、館の抱える課題はますます多様になってきました。資料調査、収集の充実はもちろんのこと、蓄積した成果をいかに活用していくのか、更に館の維持管理にいたるまで検討すべき課題は山積みされています。昨今の生涯学習の盛況は大磯町においても例外ではありません。しかしながら、その活動の場が著しく不足しているのも実情です。活動すべき

大磯町郷土資料館長 草薙 精一

会場の確保がむずかしく、思うような活動ができないという声も多く耳にします。今後は、諸施設の充実はもちろん既存施設の利用の仕方ますます大きな課題となることは間違いありません。館としても、大磯における数少ない社会教育施設としての自覚をもちながら、同時に博物館法に則した登録博物館としての機能をも充実していく必要を痛感している次第です。

資料館は一朝一夕になしえたものではありません。郷土への愛情を注ぎ続けてきた先賢たちの存在を忘れてはなりません。また、このような施設は短期において評価し得るものでもないと考えています。地味な活動を積み重ねながら、一步一步着実に進み、いつの日か顧みたま時、資料館の歩みが正しかったことを確信できるような、そんな舵取りができればと考えております。今後ともご指導のほど、よろしくお願い申し上げます。

～ 表紙解説 ～

大磯町神明前遺跡から出土した縄文時代後期の土偶の頭部（顔）です。直径約8cmの円形の中に太い眉毛・大きな横長の目・高い鼻・開いた口が表現されています。顔だけですので、男性か女性かは不明ですが、それらを超越した姿かも知れません。

土偶は縄文時代全時期（早期～晩期）に見られますが、量的には中期以後多く作られました。

また、地域的には北海道から九州にかけて分布しているものの、東日本に集中する傾向が見られます。さらに、形の上から十字形、出尻形、ハート形、筒形、山形、みみずく形、遮光器形などに分かります。このほか、首なしのものや本例のような顔だけのものなどがあります。

こうした土偶は、用途・機能が不明であるため、第二の道具とされています。

前館長のたわごと

大磯小島本陣資料のなかに、享和3年(1803)の御分間御用宿方繪圖面書上控がある。これを読んで東海道の道巾とこれに架る橋について、あらたな発見をした。大磯宿内東海道の道巾は3間2尺から5間までで山王町地内3間4尺、神明町地内4間、北本町地内4間3尺、南本町地内5間、南茶屋町地内と南台町地内が共に3間2尺となっているが、これに架る石橋は、高麗と山王町境あたりの駒留橋が長さ4尺5寸の石8枚を使い巾2間(以下長さは同じにつき省略)、山王町地内の三味線橋が巾1間、山王橋が巾1間半、南組と北組の境に架る境橋が巾4間、南本町地内の筋違橋が巾4間、南茶屋町と南台町境の鳴立橋が長さ2間巾2間である。土橋は山王町と神明町境の三沢川に架るものが長さ4間半巾2間半、大磯宿と平塚宿境の古花水川に架るものが長さ6間巾2間半。花水橋は高欄付の木橋で長さ25間半巾3間半である。橋は道巾いっばいに架っていると思いがちな現代人が、たそがれどきや、夜や、昼でもいっばい機嫌で歩くときなどは、注意しないと、どぼん、と川にはまってしまうような橋の架りかたである。

海岸には長さ290間、高さ5尺、敷1丈6尺、馬踏6尺の浪除土手(防波堤)が築造されていた。場所は海前寺下から字永楽川までである。海前寺は龍禱山宝珠院で浄土宗の寺、本堂は6間と11間半の69坪で宿内第1の大寺、天神祠と龍神祠と宇賀神祠があったが、のち廃寺となり明治20年ここに海水旅館の禱龍館が建てられた。山号の龍禱を禱龍に変えての命名だと思われる。ここから290間さきの字永楽川が誰に聞いても不明なので、やむなく計算で出して見ると、東海道沿の南本町の長さ138間× $\frac{2}{3}$ =92間、北本町118間、神明町88間、計298間で、字永楽川は三沢川の海岸寄りのところであろうと推定される。現在の三沢川は海水の逆流による被害を防ぐため、明治20年代から国への許可申請をくりかえし、幾つもの大きな沼をつなぎあわせて花水川に合流するようにしたもので、それ以前の三沢川は、そのまま海へ流れたので下流には大きな沼が2つあった。つまり浪除土手は南下町と北下町の全町を高浪から防ぐために造られたものであるが、最初の築造年代は不明である。

名所としては鳴立庵と化粧坂が掲げられているが、化粧坂については、是は江戸の方往還御並木中程にて躰き上りに御座候、と少しオーバーに表現されている。

大磯宿に義務づけられた人足100人、馬100疋のうち、

前大磯町郷土資料館長 鈴木 昇

困人足30人困馬20疋となっているが、100人100疋のため免除された地子1万坪を馬70疋で割り、北組31疋分南組39疋分としている。

大磯宿が天明年中(1781~)から文化8年(1811)まで、月貫の土蔵へ貯えて来た稗9石2斗5升は、文化8年12月24日の小平次火事で焼失してしまった、とあるのは、享和3年以後も大磯宿のことを書き加え、明治になる前年の慶応3年にまでいたっているからである。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

大磯町郷土資料館だよりの編集氏から、前館長として、資料館今後のあり方や問題などを書くように依頼された、そのために小島本陣資料のうち、ごく小さな紙にぎっしりと書き込まれた、享和3年大磯宿書上控を例にしたのである。言っておかなければならないことや現在の問題点についてはたくさんあるが、ひとつにしぼって言わせてもらうと、大磯町郷土資料館学芸員4人のうちわけが、考古2人、民俗1人、自然1人で歴史の学芸員が1人も居ないことである。資料館は古文書などが集められているだけで良いものではなく考古の学芸員が発掘調査をして古い時代のことを明らかにしてゆくことと同様に、歴史の学芸員が古文書をよく読んで昔のことを明確にしてゆく努力の積み重ねが資料館には必要で、これがない大磯町の郷土資料館は、其の面で大きな欠陥をかかえ乍ら歩んでいるようなものである。大磯町は小さな自治体ゆえ、人員を増すのに無理があるのは明白であるが、それにしても資料館考古の学芸員2人は、他の部門に対してアンバランスであり、本来教育委員会の文化財保護係が行うべき仕事を担当させられているのが実状である。将来館員の昇格人事などからめあわせて、考古1人、民俗1人、自然1人、歴史1人といった学芸員のふりわけが、最も妥当な配置であり、最もバランスの取れた資料館の歩み方であろう、と思っている次第である。

古代の餘綾(5)

発掘調査で得られた遺構・遺物などの資料がいつの時代のものであるかということを探るときに、考古学では2通りの年代を用いることがある。一つは絶対年代といい、〇〇世紀であるとか〇〇年といった実年代のことである。もう一つは相対年代といい、Aの遺物(遺構)はBの遺物(遺構)よりも古いといったように、遺物であれば形態・文様・製作技法などの特徴から、遺構であれば重なり合いや形態の特徴から、2つ以上の遺構・遺物の新旧を判別していく方法である。特に実年代を確定できるような資料が、実際の発掘調査によって出土することが稀であるため、後者の相対年代がよく用いられる。遺跡から最もたくさん、そして普遍的に出土するものが土器であるため、土器の型式変化をもとにした年代のものさし「土器編年」が組み立てられ、そこに少ない実年代資料をあてはめて、より正確なものにしていくのである。

古代において絶対年代をさぐることのできる資料には、墨書土器・木簡・漆紙文書といった記年銘資料のほかに、古銭・鈔帯・火山灰といった文献記録から間接的に年代を推定できる資料がある。相模地方で知られている実年代を推定できる資料は次の通りである。
 ①秦野市尾尻八幡神社前遺跡第28号住居址や平塚市向原遺跡第75号住居址の床面直上に堆積していた火山灰層が、延暦19(800)年に降下した火山灰であることが推定されている。
 ②相模国分尼寺(推定)金堂基壇面焼土中より出土した土器が、文献の記録から貞観15(873)年まで使われていたものであると考えられている。
 ③綾瀬市宮久保遺跡井戸址掘方面整地層中から、「鎌倉郷鎌倉里軽マ□寸稲天平五年九月」「田令軽マ麻呂郡稲長軽マ真國」と書かれた木簡が出土し、井戸址は天平5(733)年以降に造られ延暦19(800)年の火山灰の降下によって廃絶されたと考えられている。

このような絶対年代資料を相対年代の組列に当てはめていってはいはじめて、相模地方の土器編年に実年代が与えられたり、相模型土器(相模地方独特の土器)の成立時期を論じることができるのである。

大磯小学校出土の皇朝銭と供伴資料

さて、このほかに実年代を推定できる資料として古銭がある。発掘調査で出土する古銭には、貨泉などの渡来銭や皇朝十二銭などの和銭がある。町内大磯小学校遺跡は縄文時代の遺跡として1955年からその存在が知られ、1974年から数次にわたる発掘調査が実施されている。1984年の調査では、古墳時代から奈良・平安

銭名	初 鑄 年	出 土 数
和銅開珎	和銅1(708)年	4
万年通寶	天平宝字4(760)年	1
神功開寶	天平神護1(765)年	4(本例含む)
隆平永寶	延暦15(796)年	5
富壽神寶	弘仁9(818)年	6
承和昌寶	承和2(835)年	2
長年大寶	嘉祥1(848)年	3
饒益神寶	貞観1(859)年	2
貞観永寶	貞観12(870)年	1
寛平大寶	寛平2(890)年	0
延喜通寶	延喜7(907)年	2
乾元大寶	天徳2(958)年	1
不 明		2

皇朝十二銭と県内での出土例(大上:1989より作成)

時代の遺構が発見され、本遺跡が断続的にはあるが長時期にわたって営まれていたことが明らかとなった。奈良・平安時代の遺構としては、竪穴住居址や掘立柱建物址が調査されており、そのうち1軒の竪穴住居址から皇朝十二銭のうちの1枚である「神功開寶」が出土している。

皇朝十二銭とは和銅1(708)年の和銅開珎の初鑄を皮切に、天徳2(958)年の乾元大寶まで、奈良時代に3種・平安時代に9種発行された銭貨のことである。これは中央国家が律令体制の整備の一環として、先進国中国(唐)をモデルとした貨幣経済の確立をめざして発行されたものであるが、中央国家の「蓄銭叙位法」や「献物(銭)叙位」等の法令施行による奨励にもかかわらず、その流通は主として畿内を中心とするごく一部の地域にとどまったのである。そして唐銭の輸入により皇朝銭は衰退し、天徳2(958)年の乾元大寶を最後に鑄造は中止され、さらに永延1(987)年の「仏事以外銭貨通用禁止」によってその流通にも終止符が打たれるのである。

大上周三氏によると、これまでに相模と武蔵の一部を含む神奈川県内の遺跡からは、11種33枚の皇朝銭が出土している。これらの皇朝銭の出土状況は、本例のように竪穴住居址内や、掘立柱建物址の柱穴からの出土が圧倒的に多い。

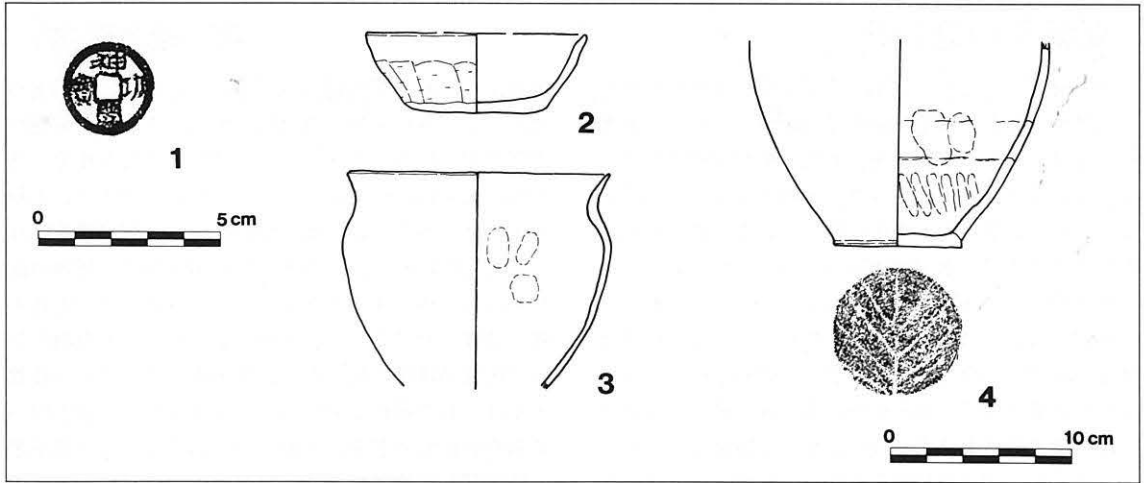


図1 大磯小学校遺跡二号住居址出土遺物

図1-1に示したものが、大磯小学校遺跡二号住居址から出土した神功開寶である。直径2.5cmを測り、遺存状況は極めて良好である。住居址覆土下層からの出土である。図1-2~3は、この神功開寶に伴うと思われる土器である。現在整理中の資料であるため、出土位置等が未検討であるが、大型破片で実測可能なものを抽出して図示した。2は相模型の土師器坏である。破片資料であるため推定で、口径は約12cm、底径は7.5cm、器高は4.4cmを測る。淡黄茶褐色を呈し、焼き上がりは軟質である。平底であるが底部端は丸い。体部外面のヘラケズリは1段の幅広で、底部外面は一定方向のヘラケズリを施す。底部外面中央に掌痕を残す。3は土師器小型甕である。淡黄褐色を呈し、焼成は良好である。口縁部内外面をヨコナデ、胴部内面の上位に指頭痕を残す。4は土師器長胴甕の底部であろう。3と同様、淡黄褐色を呈し、焼成は良好である。胴部内面に指頭痕と輪積痕を顕著に残す。底部外面には木葉痕が見られる。本住居址出土の神功開寶によって、これらの土器が神功開寶の初铸年である天平神護1(765)年以降に作られたものであるということがいえるのである。

しかしながら先にも述べたように、皇朝銭の流通は畿内とその周辺に限られていたため、相模においても流通していたとは考え難い。中沢悟氏は関東地方出土の皇朝銭を、出土状況・出土数等から分析・検討を加え、関東地方の皇朝銭は本来の流通の意味からはずれて、富の象徴や権力とのむすびつきといった点から一種の宝器として珍重され、住居内で所持したり、墓の副葬品あるいは神に対する供献物などに使用し所持したものと考えている。

いずれにしろ、こういった皇朝銭は、使用期間の問題は必ずあるが、考古学における年代決定の有効な手段の一つとして、十分に検討されるべき資料であることにはかわりがない。

引用文献

- 海老名市教育委員会 1990 『相模国分寺関連遺跡詳細分布調査報告書I』
- 大上周三 1989 「神奈川出土の皇朝銭について」『湘南考古学同好会会報』37
- 尻尾遺跡発掘調査団 1983 『尻八幡神社前遺跡』
- 神奈川県教育委員会 1983 『向原遺跡』第4分冊
- 神奈川県立埋蔵文化財センター 1990 『宮久保遺跡III』本文篇
- 鈴木一男 1991 「遺跡展望～大磯小学校遺跡～」『Report 大磯町郷土資料館だより』2
- 中沢 悟 1990 「関東地方出土皇朝十二銭の様相」『研究紀要』7 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 原 三正 1985 「古代の渡来銭」『考古学ジャーナル』No.249

夏祭りの思い出

西小磯の八坂神社は京都の八坂神社の御霊を勧請したもので、祭神は素戔鳴尊と稲田姫命であるが、祇園社の守神である『牛頭天王』も祭るので通称『天王さん』と呼んで親しまれてきた。社殿は大正6年に清水満之助氏が寄進したと棟札に書いてある。幟は近村に稀な大物で、竿の長さが15mもある。東組は『寶祚天壤無窮』と西組『奉獻祇園宮』と墨書し、天保の年号であるから160年の歴史を物語っている。祭典は京都の祇園祭を模したものと思う。御輿を中心に東西2つの山車が出て、大正初期に電灯線が張られるまでは鉾を建てその上に武者人形を飾って街道を曳いた。

さて、祭は前後10日間をかけた。先ず7月8日の幟建てから始まり、御輿を磨き、神楽殿を造り、提灯場も建てた。青年は幟を建て山車を組み立てた。9日は宵の宮となる。東組は松原から、西組は切通しから山車を曳き、小磯ばやしで賑やかな前夜祭を行った。10日は本祭である。10時に神殿で祝詞が奏上され御霊が

渡邊長吉

御輿に移されると年寄り衆が勇ましく担ぎ、若い衆が山車でしゃぎって祭の幕は切って落とされる。御輿は五穀豊穰、町内安全を祈って終日村内を練り歩く。その間、山車は笛や太鼓の音も賑やかにしゃぎり、大勢の子供が2本の太い引綱で曳いて歩く。夜の帳が降りて祭礼提灯に飾られた御輿が、街道を埋めた観衆の群れをぬって西に東に練り歩くと、東西の山車がこれを挟んで囃したるとき、小磯中が一つの大きな魂となって興奮の増埒と化した。13日の中天王と15日の仕舞天王は、日の暮れるのを待って山車を飾り太鼓を叩いて賑やかにしゃぎる。本番で満足出来なかった技を思い切り試して来年を期待したようだ。16日の神楽はご祝儀の三番叟から始まり深夜まで続く歌舞伎芝居に魂を奮われて見とれたものである。かくして10日もかけた夏祭りはとどこうりなく済み、小磯の里に新たな平和な日々が始まった。しかし再び甦る事のない村祭りの思い出である。

【行事案内】

▼夏季企画展

『なつかしの風景Ⅱ ～家と町並み～』

7月26日(日)～9月6日(日)

古写真や絵はがきを中心に、なつかしい大磯の町の様子を振り返ります。

▼子ども歴史教室(小学5年～中学2年生 30名)

今年のテーマは「昔話と伝説～おばけと妖怪を考える～」です。なお、2日目には南足柄市郷土資料館へ見学に行きます。

8月3日(月) 午前9時30分～11時30分

『おばけと妖怪の話』

4日(火) 午前9時30分～午後2時30分

『金太郎伝説をさぐる』

【資料の受入】

(寄贈) ご協力ありがとうございました。

東 町	大久保幸造氏	アンカ
西 小磯	土屋文吉氏	庚申講資料一括
西 小磯	鈴木 昇氏	行李
西 小磯	消防団第4分団	大八車
国府本郷	武井チヨ氏	ショイバシゴ
国府本郷	山田泰二氏	鉄瓶他
国府新宿	近藤理一氏	壺
国府新宿	柏木 博氏	典籍
大磯町立国府中学校		ソロバン他
小田原市	香川武彦氏	卒業証書他
小田原市	石塚勝治氏	魚類標本
武蔵野市	伊東一夫氏	婦人雑誌「處女地」

(移 管)

大磯町役場総務部総務課	典籍他
環境経済部美化センター	絵はがき他
議会事務局	鉦(議会用)

東 小磯	須藤若三郎氏	漁具一括
大 磯	椎野金造氏	漁具一括
大 磯	碓井忠夫氏	ヒドリガモ
大 磯	安部川征彦氏	鯉用マナイタ他
寺 坂	渡辺美代氏	雨下駄
生 沢	二宮治二氏	三間梯子他
生 沢	竹内治雄氏	ムギコキマンガ他

Report—大磯町郷土資料館だより— No.5
平成4年7月31日
編集発行 大磯町郷土資料館
〒255神奈川県中郡大磯町西小磯446-1
TEL .0463 (61) 4700
FAX .0463 (61) 4660